（様式３）

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

<table>
<tr><td>都道府県名</td><td>三重県</td><td>市町村名</td><td>桑名市</td><td>大学名</td><td></td></tr>
<tr><td>派遣日時</td><td colspan="5">令和７年　８月　２２日（金）　１３：３０～１５：４５
【研修の日程】
１３：００　講師到着・打ち合わせ
１３：３０～　学校長挨拶　講師紹介
１３：４０～　講義
１４：１５～　ワークショップ（日本語指導が必要な児童生徒の学力をつけていくための授業づくり～単元導入第１時の授業構想～）
１４：４５～　全体交流
１５：１５～　講評
１５：３０～　質疑応答
１５：４５　終了</td></tr>
<tr><td>実施方法</td><td colspan="5">派遣　／　遠隔　※いずれかに〇をつけてください。</td></tr>
<tr><td>派遣場所</td><td colspan="5">桑名市立大山田北小学校</td></tr>
<tr><td>アドバイザー氏名</td><td colspan="5">愛知教育大学　准教授　川口　直巳　先生</td></tr>
<tr><td>相談者
（受講者）</td><td colspan="5">主催　桑名市教育委員会事務局　人権教育課
出席者　桑名市立大山田北小学校　教職員
桑名市内小中学校　担任及び国際担当教員</td></tr>
<tr><td>相談内容等</td><td colspan="5">桑名市では、小学校中学校のそれぞれ１校を、外国人児童生徒教育の拠点校と位置づけ、取り組みを進めている。拠点校の大山田北小学校内には、初期日本語指導教室「なかま」（以下、「なかま教室」）を設置し、来日したばかりの日本語ゼロの児童生徒を対象として、約３か月間初期日本語指導を行っている。しかし、なかま教室を修了した児童生徒が在籍校に戻ってからの指導に苦慮している学校の状況がある。また、在籍学級での教科学習において、取り出しによる個別指導で学んだ力を十分に発揮しきれない児童生徒の様子がある。
そのため、日本語指導が必要な児童生徒が、在籍学級での学習の中でいきいきと活動できるための効果的な支援や授業づくり、充実した取り出し指導をおこなうための連携等についてご教示いただきたい。</td></tr>
<tr><td>派遣者からの指導助言内容</td><td colspan="5">【講義・講評内容】
「子どもをどのように捉えるか」
１．外国人児童生徒等の日本語や学習状況を捉える
〇子どもの可能性をのばすことを目的として、JSL 評価参照枠に対応した学習目標例をもとに子どもの日本語力を捉えること。
→日本語指導に関わる職員と在籍クラスの担任等とのの捉え方の相違を比較し、対象児童生徒の在籍学級でできる可能性があることに気づくこと。担任の支援の工夫につながる。
〇「ことばの発達と習得のものさし」（文科省）の紹介
母語も含めて子どものできる力をとらえていくこと。</td></tr>
</table>

（様式３）

	２．ワークショップを踏まえた講評 〇抽象的な言葉の理解について 抽象的な言葉（例：自然・政治など）は、低学年では理解できない。体験や具体語彙の積み重ねを経て、該当学年で理解可能になる。また、日本語指導が必要な児童生徒の獲得している日本語語彙は少なく、抽象概念を理解するのが難しい。ただし、母語では理解できる可能性がある。 〇日本語力への着目 語彙だけでなく、日本人の子が自然に身につけている「日本語の力」や表現方法に目を向ける必要がある。日本語指導に関わる職員と連携し、「どの表現・文法を必ず身につけさせたいか」を共有した上で取り出し指導を進めることが望ましい。 〇言葉の理解支援について（例：「工芸品」） 日本の子どもは生活経験やテレビなどを通じて「工芸品」に親しみがあり、説明されればある程度理解できる。しかし、外国籍の子は経験が乏しく「工芸品」の概念理解が難しい。指導の工夫として、対象児童生徒の母国の工芸品を見せる、視覚資料（写真・古い道具など）を活用する、「昔から大切に作られ続けているもの」という簡単な説明を加える、日本人の子が持つイメージ（古いもの、職人が作るものなど）に働きかける等がある。なお、教科（単元）で必ず理解させたい重要語を押さえる必要があるが、全ての難しい語彙を説明する必要はない。 ３．質疑応答 〇書き順について 子どもの興味やこだわりにより意見が分かれる。書き順よりも他の面で評価していくことも選択肢としてある。 〇保護者・家庭の背景を捉え直す 親の都合で来日・帰国が決まる子も多く、進学意識が低くなるケースがある。外国籍保護者は「家族」「生活」「仕事」を重視することもあるため、相手の文化的価値観を慮った上で、保護者や本人と丁寧に対話する必要がある。生活が不安定で、日本の入試制度や教育制度を知らないことも多い。 〇学び合い・集団への支援 周囲の子どもが、困っている子にどう関わるかが重要。「どうせ分からないだろう」と決めつけない。グループ活動では「良かれと思って」やってしまうサポートが、本人にとって不要な場合もある。必要な支援をどうするかを本人と話したり、グループに伝えたり、伝え方を教えたりすることが大事。また、並行して取り出し授業で教科学習につなげる工夫が必要。

（様式３）

相談後の方針の変化、今後の取組方針等	【大山田北小学校】 本研修を通して、以下の振り返りが行われた。 〇児童の「困り感」に寄り添う姿勢の大切さ 外国にルーツを持つ子どもたちは、言葉だけでなく、文化的背景や生活体験の違いから、見えにくい困難を抱えている。授業づくりの段階からその「困り感」に寄り添う意識を持つことで、より実効性の高い学習支援につながるという認識が深まった。 〇「日本語力」育成の視点と語彙への配慮 「単語を教える」だけでなく、文法や言語運用能力（日本語力）を育てることの重要性を共有できた。また、児童の日本語レベルを把握し、教科を通じた言語指導を意識する必要があると感じる教員が多かった。語彙に偏りすぎず、教えたい用語を絞って効果的に伝える工夫が必要。 〇視覚支援や具体物の効果 具体物や視覚支援は有効だが、文化や生活体験の違いにより、一律に「伝わる」とは限らないという新たな気づきが得られた。「見せればわかる」ではなく、「その子がどう捉えるか」に意識を向ける必要がある。 〇母語の重要性と文化理解 日本語だけで児童を評価せず、母語の力や文化背景を考慮する視点も得られた。母語が確立していることの強みや、文化の積み上げがないことの困難さについて理解していくことが大切。 〇保護者との関係づくり 保護者に対しても、「なぜそれが必要か」という説明を丁寧に行うことで、相互理解と協力体制の構築が期待できるという学びがあった。 この研修を通じて、授業検討や他の教員との意見交換を通して、多様な視点や具体的な手立てを得られたこと、他者と協働しながら支援策を考えることの大切さを再認識できた。「２学期以降に活かしたい」「教科に文法指導を取り入れたい」など、今後の実践への前向きな意欲も多く見られた一方で、適切な支援の方法に悩む声や、イメージを共有する難しさを感じる教員もおり、継続的な学びと支援体制の構築が求められている。今後は、「外国につながる児童」への支援を、単なる語彙指導にとどまらず、文化的背景、母語、日本語力の成長、そして教員間・家庭との連携といった多角的な視点で捉えることを大切にしながら、日々の授業実践に反映させ、全ての児童が安心して学べる教室づくりを目指していく。 【桑名市教育委員会】 ワークショップを通して、先生方一人ひとりが主体的に対話し、日本語指導が必要な児童生徒を意識した授業づくりを協議できたことで、今後の授業づくりのポイントを意識づけできた。また、今回ご教示いただいたことから、各校において、日本語指導が必要な児童生徒が在籍学級の教科学習に参加し、「授業が分かる」「発表できた」「活躍できた」という実感を通して少しずつ自信をもてるような取り出し指導を進めていくべきだと再認識できた。そのために、対象児童生徒に関わるすべての教職員と日本語指導者の連携をより密にとっていくことができるよう、支援体制の充実につながる情報発信等、取組を進めていく。